Kappa Novels

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編推理小説　**針の島**　¥600

昭和53年10月30日　初版1刷発行

著者　藤本泉（ふじもとせん）
発行者　小保方宇三郎
印刷者　鈴木貞三郎
東京都文京区水道1-2-1
公和印刷

発行所　東京都文京区音羽2
振替　東京6-115347
株式会社　光文社
電話　東京（942）2241（代）

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（榎本製本）
表紙の模様・意匠登録　116613
© Sen Fujimoto 1978
(分)0-2-93(製)02356(出)2271(0)
Printed in Japan

長編扒理小説・書下ろし

針の島

藤本　泉

カッパ・ノベルス

羽里島挽歌

遠くはてしない記憶の空を
とぶ神々はあえかな黄金色

容赦なく移る季節のはざまで
海は銀と鉛の間を行ったり来たり

はまなすの偽りの花が
夕日の海の血に咲くとき

骨まで蒼ざめて
消えるのはだれか

目次

一章　羽里島の死者たち　5
二章　うそをつく島　28
三章　島の娘子軍　52
四章　酒場の女子中学生　70
五章　捜査の迷い路　94
六章　小島と都との間　128
七章　ふきだまりの都　151
八章　黄金の雨　179
九章　むらがる神々　207
十章　ダイイング・メッセージ　232
解説・天野龍　246

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

本文のイラスト　中原（なかはら）　脩（おさむ）

一章　羽里島の死者たち

1

その惨事を目撃する直前、五十嵐刑事はほとんど無心に、羽里島の風物を眺めていたのであった——。

ほんの少し雲があるだけで、美しく晴れた五月の空は、海の輝きを映しているようにまぶしい。長い暗い冬のあとで、急激にやってきた北の国の夏に特有な、泡立ちあふれる生命感がそこにはある。

船着場に近い神社前の茶店は、立夏を明日にひかえた今日、子どもの日と日曜日がだぶるので、早目に店開きしたらしい。

英語の単語カードを繰りながら、ひとりで店番している少女が、初め、リックと発音したので、五十嵐はへんに思って、きき返した。

「夏が立つと書くのよ、おじさん」

まじめにそういう大柄な少女は、高校生らしい。五十嵐は場ちがいな感じに、眉をあげた。

「おれは、おじさんじゃないよ」

「したらば、お兄さん？」

年齢にしては、なんとなく幼い物言いをする彼女の前には、わずかばかりの食料品がならんでいるだけだ。まだ、町から荷が入らないと言う。

五十嵐厚は、とりあえず罐入りのコーラを買って飲んだ。朝から島の中を歩きまわって、かわき切った若いのどに、つめたい液がしみ通る。

鳥居のほうへ爪先上がりに続く道は、岩がちで、周囲は、はまなすのしげみだった。堅く輝く若みどりの枝々が、低くさしかわす向こうには、奇もない岩浜が、打ち寄せる白波に洗われている。

そのかなた、ほぼ十キロのあたりに見える本土は、さながら群青のうるし絵である。山形から秋田へと、重なる山なみの、複雑にも優雅な線がこの上なくつややかだ。その中から、山裾を長くひいて立ち上がった鳥海山は、頂上を雲で覆われ、その下の山脈はうっすらと銀粉をはいて、かすんでいる。

彼はコーラの空罐を、そばにあったごみ箱にほうりこみ、ついでに、自分の背広の袖に、蜜蜂が一匹すがりついたのを、指先ではじいた。弱っていたらしく、もろく地に落ちてもがく小さい昆虫を、靴の先で踏みつぶす——。

……そのとき、どこかで、叫び声がした。それがすぐあきらかに、男のものとわかるわめき声となった。

続いてたまぎる声が、地ひびきと入りまじる。何ごとが起こったのか。

五十嵐は反射的に立ち上がった。そのとき、目の前三十メートルほど先にある鳥居の下へ、その声の主が、ころがり落ちて来て、もんどり打った。

岩がちのわずかな平地の上で、人の形が荷物のように二、三回はずむ。それは思わず息を飲む恐ろしい光景だった。起き上がろうともがくが、それができない。

とび上がって駆けつける五十嵐の数歩先で、しぼり出すように、苦しげにうめき、四肢をはげしくふるわせる。なかばねじれた軀幹が、死にかけた昆虫さながら、力なく仰向けになる。するとそれはもう、意志を剝ぎとられて、みじめにうごめくだけの姿態であった。

「どうした？　あんた！」

はげしいダッシュののちに、五十嵐は叫んだ。

反射的に、彼は男が落ちて来たほうをふり仰ぐ。高いけわしい石段の上に、人影も見えないのを、瞬間にたしかめてから、男のかたわらへしゃがみこんだ。

「どうした？　しっかりして……」

同じことを、力いっぱい、また叫ぶ。すると彼の声がどうやらきこえたのか、男は何かことばらしいものを発した。苦しみのうめきだけでなく、ほかの音声だ。

「ええ、なんだって？」

五十嵐は直感的に、それがこの男の最後の声になるような気がした。彼自身も必死の声を出す。「何て、言った？」

男のゆがんだ唇に、耳を押しつけるようにする。

しかし、やっとのことで聞き取れたのは、ほとんど意味のわからないことばだった。

「だま……された」

男はそう言ったようだった。「ぎゃくの……、くすりだ」

「何だって？　逆の薬？」

五十嵐は思わずその肩をつかんだ。すると、それは男の体に、ひどい苦痛を与えたらしい。それでなくてもす

り傷だらけで、血のにじんだ男の顔はさらにひどくゆがんだ。それきり、もう声を出さなくなった。

五十嵐は火傷したように、あわてて手を引っこめる。

脳溢血で倒れた人の体を、おどろいた家族が強くゆすぶったため、その場で絶命した例を、彼はちらと思い浮かべ、唾を飲みこんだ。

「あんた！　しっかりするんだ。言ってくれ。どうしたんだ？　おい！」

なおも彼は叫ぶ。もう、まったくなんの反応も見せなくなった男の顔を、さらに食い入るように見る。骨折や捻挫が当然あると思うと、それ以上、どこへも手をふれることができないのであった。

高校卒業後、すぐ警察学校へ入り、それから試験にパスして刑事になるまでの数年間に、五十嵐が実際に見た交通死傷事故や、自殺や、殺人事件は、相当な数である。その中には、思わず顔をしかめるほどむざんな事故や、また、理解のほかの、奇妙な偶発事があった。しかし、その彼も、こんなにして、実際に墜落の現場を目撃したのは、初めてだ。

負傷者の目は、すでに完全にうわずっている。白目だけむき出したそれは、不気味に大きかった。

五十嵐の驚愕した視線の先で、その白目に血がにじみ始めた。みるみる、ふたつの小さい血の塊のようになる。すると、負傷者の下顎がつき出て来て、口が大きく開いた。弱々しいあくびのかっこうを見せたのである。

それはもう、息を吸いこむことができなくなった徴であった。下顎呼吸なのだ。すぐそこに死が迫っている。ことばもない、とつぜんの、むごたらしい死が……。

五十嵐は職業的に男の手首を取って、脈をみた。筋肉労働者のそれではない。皮膚がなめらかで、爪の形もとのっている。それにしても、脈の乱れはひどい。躍り上がるように打ったかと思うと、すぐに触れがたく弱る。結滞が急速に進行しているのだ。

その男は、精力的な四十代初めといった印象だった。中背で、濃い頭髪と、ひげの剃り痕。頬骨の張った意志の強そうな顔には、早くも錆び始めたような死の色がある。

服装はグレーに細いストライプの、夏のスーツ。黒の革靴。目立たないが、しゃれている。金もかかっている。

これは、この島の人間では……とても、なさそうだ。それにしても、だまされたとは、どういうことか。それと、逆の薬だ——という意味は何なのか。

そのことばは、ただ、苦痛と衝撃による混乱から、わけもなく発せられたのか。それとも、半意識のうちにも、何か重大なことを伝えようとして、最後の力をふり絞った結果なのだろうか。

五十嵐は、混乱して立ち上がった。

なんともおだやかならぬことばを聞いた刑事の、分裂した意識がそこにあった。ほとんど反射的な、調査への欲求と、負傷者を手当てしなくてはならぬ義務感とに、彼はとっさに、板ばさみになっていた。

とても自分の手に負える負傷ではない。医者と警官の双方が、同時に必要だが、どうするか？　茶店には、たしか……電話はなかったようだ。

彼は体がふたつ欲しい思いで、はげしく首をめぐらした。

何かしら、これは、ただの事故ではない感じだ……。

見習い刑事として、現任補習期間をついこのごろ終え、一人前になったばかりの、若い五十嵐の心の中には、決して、はやってはならないという自戒心がある。なにごとも出だしは慎重でなくてはならないのだった。しかし、そう承知している同じ心の底には、なんとなく功名をのぞむものがひそんでいた。

ひょっとすると、これは刑事としての、初の大仕事になるかもしれない。しかもなんという偶然か、自分はその場に居合わせたのだ――。

ふたたびふり仰ぐ鳥居の中のけわしい石段は、そんな彼の思いを裏付けるにふさわしいものだった。その上にあるのが、小さい羽里神社の社殿で、ふつうだったらまったく人気のないところであるのを、五十嵐は知っている。それゆえにこそ、そこに、もしかしたら危険な人物が……ひょっとしたら、目の前に倒れているこの男を突き落とした犯人が、隠れているのではないかと、疑えば疑うことができそうなのだ。

五十嵐はそのけわしい階段を、駆け上って行きたい衝動に、思わず身ぶるいした。それは単に、目の前のできごとによって得た、カンから来るだけの類推ではない。

かって、五十嵐厚は、その上の境内で、ひとつの異常な経験をしていた。

高校三年生の夏、初めてこの島へやって来たとき、彼はある恐ろしい目に会い、それ以来、ここは怪しからぬ人間が住む島だという印象を、拭い切れないでいるのだ。

……警察官には、日曜と祭日がだぶっても、特に意味がない。今日はただ、五十嵐にとって、夜勤明けの休み

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

というにすぎない。それを利用してここへやって来たのは、受持ち区域の初のパトロールのためもある。しかし、同時に、傷つきやすい青春に、ひとつの心の傷と、今日の職務への方向を与えた場所を、ふたたび目にしたかったからである。刑事という確たる肩書を持った人間として、不穏分子のいる地域を歩きたかったからである。

年月は、あれからずいぶん経った。しかし、年少だった五十嵐を、忘れられないような手段でいためつけた連中が、その後、すべて、島を出払ったとは、とても思えない……。

今朝、船着場へおりたとき、彼はまず過去の現場たる境内へ、直接、足をのばした。

石段は幅が狭いのに、高さのほうはふつう以上で、ひどく登りにくい古風なものだ。いわゆる胸つき階段なのである。

これは踏みはずしたら、それこそまっさかさまだ——。五十嵐はいつかここへ来たときにそうしたように、今朝もまた用心しながらふり向いては、危険な斜面を、眺め眺めしたのであった。

石段の数は百以上もあるのに、踊り場とては、ただの一箇所もないのである。

……もっとも、それはそれとして、いま目の前にいる男のようすでは、よほど上のほうから墜落したにちがいないのだ。

2

五十嵐は習慣的に、そのとき腕時計を見た。午後一時三分すぎだ。

彼は意味もなく、はげしく首を振り、いっさんに茶店のほうへ駆け出した。

そこに電話はないとしても、店番の少女にきけば、最寄りの電話のありかがわかる。それで医者なり駐在なりが呼べる。

椿の葉のように両端のとがった、長楕円形のこの島は、本土に向いた尖端の部分近くに、駐在所も小・中学校もあるのであった。そこが集落の中心部なのである。

そして、船着場も茶店も神社も、そこからひどく遠くはない。事故現場にこそ人気はないが、救けを呼ぶのに、そうむずかしくはない。

彼は駆けながら、つい先刻立ち寄ってあいさつして来た駐在所の阿部巡査を一瞬思い出した。うまく、いま、

所にいてくれればいいが。そして、医者――。ひょっとすると、この島は……いや、ひょっとするとではない、ここには医者はいないはずだ。

彼はほんの少し速力をゆるめ、すぐにまた前より早く駆けた。島全体で、七十戸に足らない世帯数だから、医者がないのもむりはない。すると――だから、もう、あの男は死んだも同然というわけか。

どのみち、あれでは、もう、とても助かるわけにはいくまい……。

茶店の少女は、けばけばしいカラートタンの軒の下で、柱につかまるように立っていた。

食い入るようにこちらを見ている目が、まん丸い。人を吸いこむように、輝く黒い目だ。

「電話は、どこだ？」

五十嵐は食いつかんばかりに叫ぶ。

少女はそこから事件を目撃して、立ちすくんでいる感じだ。

「あ……、あの男ァ、どしたべ」

唇をふるわし、口ごもる。「死んじゃった？」

「まだ、生きてる」

五十嵐は吠えた。「医者は？　電話は？　駐在を呼ばねば――」

そのとき彼は、すぐさま自分を案内して駆け出す少女の姿を予期した。しかし、彼女は案に相違して、柱にしがみついたまま、一歩も踏み出さない。

「医者はいない。電話ァ、あっちさ……」

顎で、船着場の向こうの集落のほうをさすだけだ。

「それなら、お前は、あの怪我人の傍へ行って、ついてくれ」

五十嵐は、歯ぎしりしたい思いだった。「いいか、もし、あの人が何か言うようなら、よくきいて、言う通りしてやれ！」

彼がそのまま駆け出そうとするのへ、少女は、笛のようにするどいことばを投げた。

「おら、嫌だ」

恐がっているのかと思うと、それがそうでない。「店ェ離れたら、叱られる。もうすぐ、次のフェリーが来るもン」

「この、ばかやろう」

五十嵐は思わず、どなった。「あの人は、死にかけてるんだぞ」

「関係、無ェ」

少女は彼に負けない声を出した。「おら、ここにいる」
「ぶんなぐるぞ、この女ァ」
五十嵐は気がせいた。こんな子どもを相手にしてはいられない。そう思うと、脅しのことばが口を衝く。「おれは飽海署の刑事だ。言うことをきかないと、あとでひどいぞ。行って、あの人を見てろ！」
そのまま、まっしぐらに集落の入口のほうへ向かって駆け出し、十歩ほどでふり返る。その目と、少女のおどろいた目が合う。
「早くしろ！」
彼は声をはげました。そのあとはふり返らなかった。入江に沿ったゆるい坂道を、ひたすら駆けおりた。すぐ目の下にある小さい船着場に、だれかいないかと思って見たが、人影はない。
日に数回、対岸の飽海港との間を往復する、小さいフェリーの影もない。
彼が目ざしている岩がちの入江の向こうは、ずっと低くなった浜地で、これもカラートタンの建物がならんでいる。
大きい赤い屋根は公民館だ。すぐわきに火の見櫓が見える。その向こうには、小・中学校の分校の青い屋根——。これが、島では一番大きい屋根だ。そのまわりに寄りつどう、小さい屋根と屋根。駐在所は陰になって見えないはずだ。
道は五十嵐の目の前で、ほんの少しうねりながら、砂色だった。集落の中へ、ねじれて入りこむ。
そこから折りよく、自転車に乗った男が、こちらへ向かってやって来るのを見て、五十嵐は助かったと思った。
とびつくようにその自転車をとめる。警察手帳を見せ、駐在所に事故を知らせてくれとたのむ。
「お前さんが、飽海署の？」
かなりの老人であるその男は、手帳のこまかい文字が読みとれないらしい。うなずきながらも、陽に焼けた顔に不審の色を浮かべるようすだ。「何しで、いま、ここにいるですね」
事故におどろくより、その疑問が先立つのも、島という地域のせいだろうか。
「ただ……パトロールに来てたです」
五十嵐は口早に言って、すぐに、いま駆けて来た道をとって返した。こんどは坂を上るのだから、スピードが出ない。それでも休み休み駆け続けて、鳥居前へもどった。

時間は一時十六分すぎ――。駆け出して行ってから、まだ十三分しか経っていない。
横たわった男は、姿勢を少しも変えていず、少女はその傍に、棒のように突っ立っていた。
男はいっそう力を失ったのか、血の塊の双の眼を、もうつぶってしまっていた。
五十嵐は息を切らしながらしゃがみこんで、もう一度、その脈を取る。かすかだが、まだ指先に触れるものがあるようだ。死んではいない。
「何か、言わなかったか」
彼の質問に、少女はそっけなく首を振る。「いますぐ駐在が来るから、それまでたのむ」
五十嵐は石段を登り始めた。一息に駆け上がれるような、生やさしい石段でないことは、よくわかっている。
彼は長距離を走る要領で、初めから呼吸をととのえ、歩調を正した。どうやら休みなしに登って行った。
さすがに、最後のところではひどく喘いだ。のどが痛んだ。やはり急いでいた。あとをふり返りさえしなかったのだ。
頂上へたどりつくと、彼はそれでも休みなしに、息せき切って境内へ入って行った。
今朝来て、その辺をひとわたり見たばかりだ。何がどの辺にあるか、よくわかっている。
木の鳥居はなかなか大きくて立派だ。その奥の社殿はかや葺きで、これもこんな小島の鎮守にしては威厳のある構えだ。羽里神社と黒うるしで大書した、木の額がかかった下に、鈴を引く太い紐。その五色がまだ、ま新しい。
彼は社殿のまわりを一回りし、縁の下をのぞいた。周囲の木々の間をも、すかしてみた。もし、あやしい人物がいたのだとしても、いまごろまでここにうろついているはずがない。そう決めながらも、一応、丹念に見る。地面も探す。何か変わったものは落ちていないか？　ない……。
耳をすますと、下のほうからはごくかすかに波の打ち寄せる音が伝わって来る。風が海から吹きあげて来るからだろうが、それだけ静かで、あたりには人の気配も感じられないのであった。
木々の間では何かしら小鳥たちがさえずり交わす声がする。それに混じって、どこかで虫の羽音のようなうなり声もかすかにひびく。蜂の巣でもあるのだろうか。
彼はさらに、社殿の斜めうしろにある、参道へ入りこ

もうとして、やめた。今朝、その道をおりて行ったから、行く先がどこなのかはわかっている。初めは少し急で、やがてなだらかな下り坂になる、末広がりのその参道は、この島のちょうど中心部へ出るのである。

そこは段丘の中腹で、道を右へとると、北浦と呼ばれる小さい集落へ通じるのだった。

それでは少し、事故現場から遠ざかりすぎる。駐在巡査の顔を見て、負傷者の処理についての仕事の引きつぎをしてないのが、五十嵐の気にかかっていた。

あんな頼りない少女に、生死の境を彷徨している人間をあずけておいてはならない。

彼は急いで石段の上へ引き返した。改めてその急傾斜に眉をひそめながら、降り始める。

あの男はどの辺から落ちたのか、それでも、何か目印になるものがあるかもしれないと、彼は目を配った。

すると、あと十段ほどで降りきるあたりに、うす黄いろい、小さい丸いものが落ちていた。とっさに五十嵐は、ポケットからティッシュペーパーを出し、包むようにして拾い上げる。それはうすくて軽い、金属性の、瓶のねじぶただった。直径はぐい飲みの口ほどもあろうか。

『逆の薬だ……』という、負傷者のことばをとっさに思い出し、五十嵐は鼻を近づけて、そのふたの匂いをかいだ。

何かしら樹脂の匂いに似た、かすかなよい香りがした。何の匂いだろう。彼は一瞬、首をかしげて記憶の中を探したが、わからなかった。

それにしても、そのふたはほんの小さいものではあるが、ふつうなら、こんなところに落ちていそうもない品だった。

風雨にさらされて穴だらけになり、角も丸くなった古い石段の上には、落ち葉や小さい枯れ枝がうすくいちめんに散り敷いている。蟻の行列が忙しそうにその間を、蜂の死骸などひいて歩いている。

そんなところにころがっているせいで、それはたいそうきれいなものに見えたのだ。事実、つい今し方そこへ落ちたばかりのように塵ひとつつかず、明るくクリーム色に光っていた。

五十嵐は、当然、瓶の身のほうも、付近にあるはずだと思った。大急ぎの、しかし、皿のようにした注意深い目を、そのあたりにくまなくそそぐ。このふたの大きさならば、瓶の身も、そう小さいはずはないと、目測しながら……。

石段の両側はいちめんの灌木や、草のしげみだが、下のほうは両側がきれいに除草され、地肌が見える。
五十嵐は這うようにして降りながら、なおも探した。しかし、ついに、それらしいものは見あたらなかった。

3

まもなく段をくだり終わった彼は、鳥居の向こうの人だかりに、目をみはった。時計を見ると、彼が段を登り始めてから、まだ二十分ぐらいしか経っていない。
それなのに、人家もなく一本道のこの島の突端へ、もう、こんなに人が集まったのだろうか。
バイクがあって、自転車があって、ミニトラックの形まで、そこには見えている。なるほど、これが島の機動力というわけか。
しかもまだ、あとからあとから人が、二輪で、四輪で、あるいは足で駆けて、村のほうからやって来るようだ。犬までがついて来て、走りながら吠えている。
男たちはさすがにこの時間、漁に出ていて、姿を見せないようだ。しかし、これでは、島に残っている人間のうち、かなりのパーセンテージを占める人数が、まもなく神社前にすべて、集まってしまうのではあるまいか。——ちょうど祭日とかさなった日曜日のひるすぎで、子どもたちが家におり、また、それにつれて女たちも多く在宅したとしても……。
五十嵐は警察学校を出て、同じ山形県内鶴岡市の派出所勤務になったばかりのころのことを、すばやく思い出していた。近くにある有名な信仰の山、羽黒山の麓で交通事故があり、助力を求められて出て行くと、人気もないような山間に、これはとおどろくほどの人だかりができていた。
そういうところでは、いっそ人口が極端に少ないだけに、人恋しさが、むしろ町部よりも密な情報網を作り出しているらしい。それに呼びよせられて、よんどころない用事のある者以外は、みんなかなりの遠出をして、やって来るのである。
そうして、五十嵐が記憶をたぐってみるほどに、目の前の野次馬のようすは、たしかにいろいろな点で、羽黒山麓のそのときの光景によく似ているのであった。
そこには、およそ、屈強な若い、また壮年の男というのは姿を見せていない。大声で話し合いながら、負傷者の世話をするのは、もっぱら主婦たちだ。中にはこぼれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton